

体育

平成27年度 教育論文

自らめあてをもち
豊かにかかわり合う 体育学習
～「わかる・できる」楽しさを求めて～



御船町立木倉小学校
研究同人

はじめに

平成23年4月から全面実施された小学校学習指導要領では、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要であると示され、特に、体育科では、「運動に親しむ資質や能力の育成」「健康の保持増進」及び「体力の向上」の三つの具体的目標が相互に密接な関連を持っていることが示されました。さらに、この三つが体育科の重要なねらいであり、自ら各種の運動の楽しさや喜びを味わい、仲間と仲よく運動をし、体力の向上につながる実践力を身に付けた児童の育成を図ることが求められています。

体育科の今日的な課題として、児童の体力低下傾向があります。また、県内抽出校を対象とした運動に関する意識・行動の実態調査結果から、中学年から「運動に対する好意度や有能感」に二極化が見られ、特に、高学年女子については、「運動習慣」も同様の傾向が見られるようになり、体力と相関があることが明らかになってきました。

本校児童の体力に関する実態は、体力テストの結果からわかるように、県平均を上回る項目が多数ありよい状況にあると思います。しかし、種目別では立ち幅跳びやボール投げに、要素別で見えていくと筋パワーに課題があります。また、学年・男女間に格差があることも気になり、決して現状に満足できる状況にあるとは言えません。

そこで、本年度は研究主題を「自らめあてをもち 豊かにかかわり合う 体育学習」とし、児童が仲間と共に運動の楽しさや体を動かすことの喜びを味わうことを目標に、「教科体育」は4つの視点から、「体力向上」は3つの視点から、課題解決のための取組に力を入れてきました。

体育は、教師の適切な手立てや肯定的な言葉かけ、仲間とのかかわりの中で、「やった」という達成感や、「わかった・できた」という満足感を実感できる素晴らしい教科であると思います。本校の子どもたちが、体育で学び、身に付けた力を活かして、これからの社会を生き抜く、心身ともにたくましい子どもに育っていくことを願っています。

これまで、試行錯誤の中から研究の方向性を模索してきたところではありますが、まだまだ十分ではありません。ここにまとめました実践論文に対し、多くの気づきやご示唆をいただき、今後の本校研究のさらなる充実につなげるとともに、その成果を子どもたちに返していきたいと考えています。よろしく願いいたします。

目 次

はじめに

I	研究主題について	．．．．．	P 1 ～ P 2
1	研究主題		
2	主題設定の理由		
3	主題のとらえ方		
II	研究の構想	．．．．．	P 3 ～ P 5
1	研究の全体構想図		
2	研究の仮説と視点		
3	研究の組織		
4	研究の経過と今後の予定		
III	具体的実践	．．．．．	P 6 ～ P 17
《	仮説1：教科体育の充実	》	
1	【視点1】意図的・計画的な教師の直接的指導の在り方		
2	【視点2】教材、場づくり・教具の工夫		
3	【視点3】めあてのめたせ方の工夫		
4	【視点4】学び合う場の工夫		
5	【その他】指導に生かす評価の工夫		
《	仮説2：体力の向上	》	
1	【視点1】体力向上をめざす時間と場の設定		
2	【視点2】「のび」が実感できる工夫		
3	【視点3】日常的に運動に親しめる環境整備		
IV	研究結果の考察及び成果と課題	．．．．．	P 18 ～ P 20
1	「教科体育の充実（仮説1）」の考察		
2	「体力の向上（仮説2）」の考察		
3	研究の成果		
4	今後の課題		

おわりに

参考文献

研究同人

1 研究主題について

1 研究主題

自らめあてをもち 豊かにかかわり合う 体育学習 ～ 「わかる・できる」楽しさを求めて ～

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領の趣旨から

「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和を重視する、「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。体育科改訂の要点からは、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う観点を重視し、各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるような体育学習をめざしていくことが求められている。また、運動の系統性を図るとともに、児童の発達段階を踏まえ、指導内容の明確化が図られ、指導と評価の一体化によって、指導内容の確実な定着が求められている。

(2) 体育科の今日的な課題から

全国的に、体力の低下傾向、積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化傾向への指摘があり、生涯体育の観点からも運動好きな児童を育てる必要がある。また、人間関係が希薄になり、友だちとのコミュニケーションを苦手とする児童が増えてきている傾向があることから、仲間とかかわり合う場を設け、相手を思いやる心や認め合う態度などを育てていく必要がある。

授業においては、運動の楽しさや喜びが味わえるよう、児童の実態に応じて、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決する学習の中に、学習内容の確かな定着をねらった活動や場面をバランスよく組みこんでいく授業展開が求められている。

(3) 本校の教育目標から

「豊かな心と確かな学力を身につけ、心身ともにたくましい『木倉っ子』の育成 ～あかるく かしこく たくましく～」の教育目標を具現化するために、児童一人一人のよさを伸ばす教育を推進することや豊かな人間性とたくましい体をはぐくむことをめざしている。

(4) 児童の実態と教師の指導の状況から

「教科体育の充実」においては、これまでの継続的な取組により、本校児童の体育学習に対する関心意欲は高く、9割以上の児童が「体育の授業は楽しい」と答えている。また、ほとんどの児童が自らめあてをもって学習できている。教師の指導の状況としては、平成21年度から意図的・計画的な学習計画と評価計画を作成し、実践を積み重ねてきた。しかし、さらに児童の主体的な課題解決学習を求めて、より豊かな学び合い、かかわり合いの中で「わかった」「できた」との歓声があがるような体育の授業をめざしている。

「体力の向上」においては、今年度の体力テストの結果から、種目別では立ち幅跳びやボール投げに、要素別では筋パワーに課題がある。そこで、トレーニング中心ではなく、児童が主体的に取り組むために、「運動遊び」「かかわり合い」「日常化」をキーワードとした取組を行っていく。

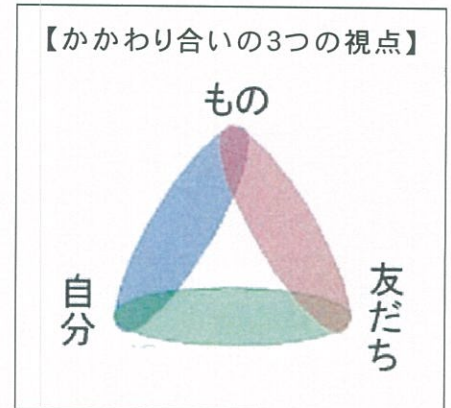
3 主題のとらえ方

(1) 「自らめあてをもつ」とは

「自らめあてをもつ」とは、運動を楽しみたいという欲求から課題をもつ姿であり、自ら考えたり活動を工夫したりして、課題解決をめざし、運動のもつ魅力により積極的にふれていく姿だととらえている。

(2) 「豊かなかかわり合い」とは

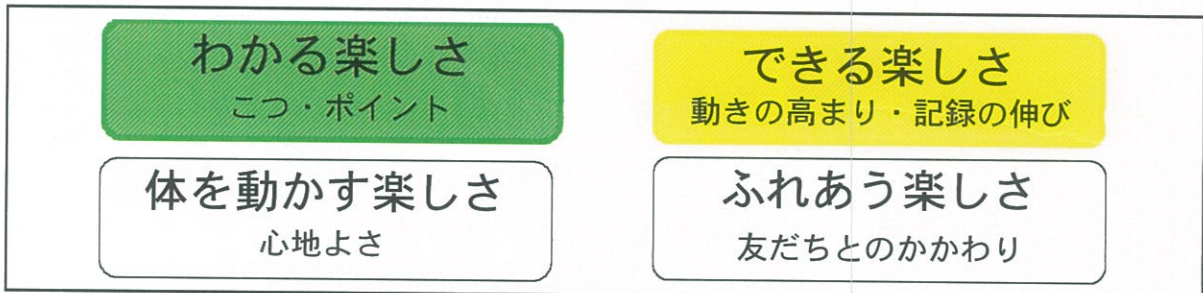
「豊かなかかわり合い」とは、「自分」「友だち」「もの（場やコート、ボール、ルールなど）」の関係から運動の世界を広げていくことであり、一人一人がみんな違うという認め合いから出発し、「異なった個性の全員が、その運動のもつ特性にふれた楽しみ方を獲得するにはどうしたらよいか」を仲間とともに考え、協力して学習を創り上げていく姿だととらえている。



(3) 「体育学習」とは

本校では、体育学習を健やかな体をはぐくむための学習ととらえている。「教科体育」や「全校体育」を中心的な学習と位置づけ、体育的行事や休み時間の遊びなどは、補完的な位置付けにしている。

(4) サブテーマについて（「わかる・できる」楽しさとは）



運動の楽しさについて、本校では、高田典衛氏（元横浜国立大教授）の「楽しさ4原則」をもとに、上記の4つととらえている。

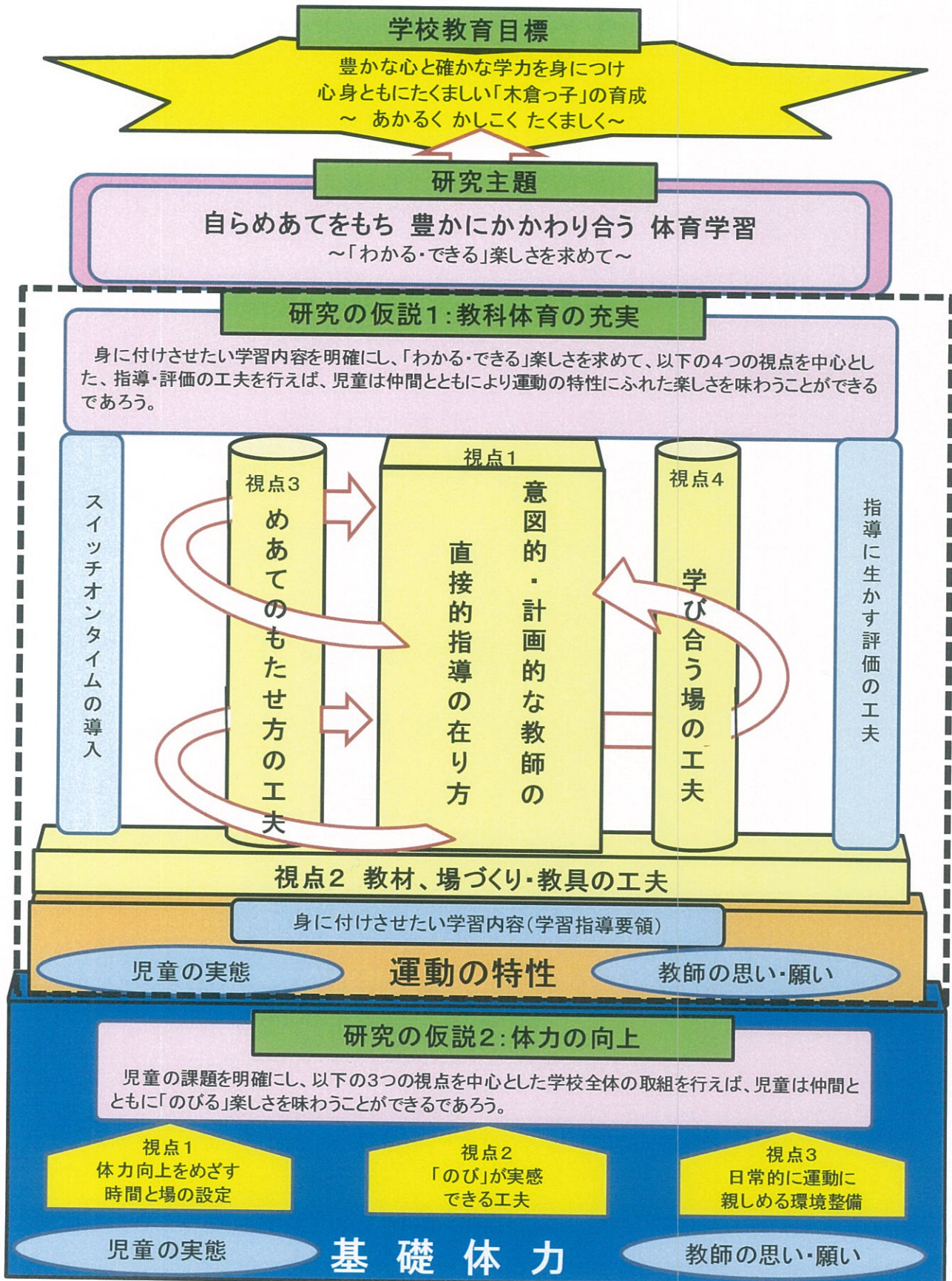
学習指導要領の改訂により、学習内容の確かな定着を図ることが重要視されていることから、「わかる・できる」楽しさを子どもたちに味わわせることが一層大事だと考えた。

そこで、学習指導要領解説で明確にされた学習内容を整理し、「いつ」「何を」「どのように」指導するのか、学習計画・評価計画の中に明記することで、指導者が確実にその内容を指導するようになり、児童の学習内容の定着へつなぐと考えた。

つまり、児童が運動の特性により深くふれ、主体的な課題解決学習に取り組み、豊かにかかわり合うなかで、「わかる・できる」楽しさを味わうことができると考えた。

II 研究の構想

1 研究の全体構想図



◀ 仮説1：「教科体育の充実」 ▶

身に付けさせたい学習内容を明確にし、「わかる・できる」楽しさを求めて、以下の4つの視点を中心とした指導・評価の工夫を行えば、児童は仲間とともに、より運動の特性にふれた楽しさを味わうことができるであろう。

【視点1】意図的・計画的な教師の直接的指導の在り方

身に付けさせたい学習内容（技能や技能にかかわる思考・判断）を、いつ、どのように指導するのか整理し、計画を立てる。

さらに授業の中に、技能のこつやポイントを児童とともに明らかにしていく場面を設定する。

【視点2】教材、場づくり・教具の工夫

学習内容を効果的に身に付けさせることができるように、運動の特性や児童の実態を踏まえて教材、場づくり・教具を工夫する。

【視点3】めあてのもたせ方の工夫

主体的な課題解決学習に取り組むことができるように、自分の課題に合った「わかる・できる」につながるめあてをもてるように工夫する。

【視点4】学び合う場の工夫

互いの動きを高め合うような言葉かけを増やしていけるように、直接的指導場面で共有化したものや児童の気付きによる発見ボードを活用したり、ペア学習・グループ学習を取り入れたりと、学び合う場を工夫する。

◀ 仮説2：「体力の向上」 ▶

児童の課題を明確にし、以下の3つの視点を中心とした学校全体の取組を行えば、児童は仲間とともに「のびる」楽しさを味わうことができるであろう。

【視点1】体力の向上をめざす「時間」と「場」の設定

児童が仲間とともにかかわり合いながら、運動に親しむ時間と空間を設定する。

トレーニング的なものではなく、夢中になって体を動かす遊びの中で自然と体力が高まることをめざす。

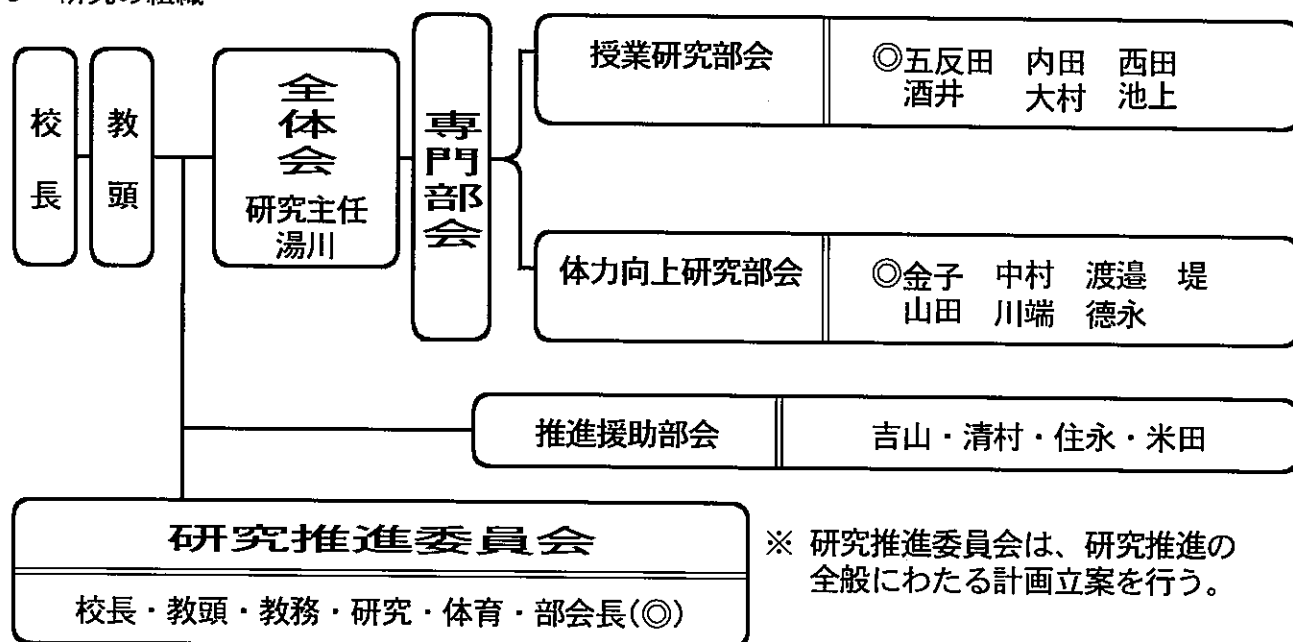
【視点2】「のび」が実感できる工夫

児童が伸びる楽しさや達成感を味わうことができる取組をめざす。そのために、記録の「のび」が実感できるような場や教具等を工夫したり、挑戦の機会を設けたりする。

【視点3】日常的に運動に親しめる環境整備

児童が日常的に運動できる環境を整える。また、児童自身の「主体的に運動にかかわろうとする意欲的な姿」をめざす。

3 研究の組織



4 研究の経過と今後の予定

月	内 容	月	内 容
4	○年間計画と研究主題について ○研究の組織と構想について	10	○講師招聘授業研究会 (2年「器械・器具を使つての運動遊び」 五反田・池上) (5年「走り幅跳び」湯川・大村) 〈上益城教育事務所 信國指導主事〉 ○研究発表会に向けて
5	○専門部会		
6	○研究授業事前研・事後研 (3年「浮く・泳ぐ運動」金子) 〈御船町教育委員会 鋤崎指導主事〉	11	○研究発表会授業事前研 ○発表会の資料作成 ○研究発表会授業事前研 (6年「体づくり運動 体力を高める運動」内田)
7	○専門部会 ○1学期の実践のふり返し ○夏季休業中の研修について	12	○研究発表会 ○研究発表会の反省 ○研究論文の作成について ○2学期の実践のふり返し
8	○専門部会 ○指導案・教具・場づくり検討会	1	○研究論文の作成 ○研究授業事前研
9	○講師招聘授業事前研 (2年「器械・器具を使つての 運動遊び」五反田・池上) (5年「走り幅跳び」湯川・大村)	2	○授業研究会 ○「性に関する指導」授業研究会
		3	○授業研究会 ○今年度のふり返し ○来年度へ向けて

Ⅲ 具体的実践

≪ 仮説1：教科体育の充実 ≫

1 【視点1】意図的・計画的な教師の直接的指導の在り方

【基本的な考え方】

学習指導要領解説体育編から身に付けさせたい学習内容を整理し、授業の中での直接的指導を意図的・計画的に行っていく。

【手順】

① **身に付けさせたい学習内容**を明確にする。

学習指導要領解説体育編の例示から、当該学年で指導する技能や技能にかかわる思考・判断を整理し、まとめる。

② **直接的指導のポイント**を整理し、指導計画を立てる。

身に付けさせたい学習内容と児童の実態から、本単元で指導する「技能のこつやポイント」（器械・器具を使つての運動遊び領域の「技能の視点」）等をより具体的に書き出し、単元の中で「いつ」「何を」指導するのかを考えて、計画を立てる。

③ 予想される**イメージ言葉**を考える。

直接的指導場面で、「技能のこつやポイント」（「技能の視点」）等について、共有する際の言葉を、児童にとってイメージしやすい言葉で考えておく。

④ **学習計画**と**評価計画**を作成する。

⑤ 1単位時間の中で、**直接的指導を行う場面を設定し、実践**する。

⑥ 毎時間授業を振り返り、変化していく児童の「実態」を踏まえ、次時の直接的指導について再検討・修正する。

(1) 第2学年「われら 木のくらにんじゃたい!」（器械・器具を使つての運動遊び～固定施設（肋木・平均台）・マットを使った運動遊び～）の実践から

【手順①】技能と技能にかかわる思考・判断について、身に付けさせたい学習内容を明確にした。

<技能>

- a 肋木を使って、登り下りや懸垂移行などを行うこと。
- b 平均台を使って、渡り歩きや跳び下りなどを行うこと。
- c マットに背中を順番に接触させるなどして、いろいろな方向に転がること。
- d 手や背中で体を支えているいろいろな逆立ちを行うこと。

<思考・判断>

- a 肋木・平均台・マットを使った運動遊びの行い方を知り、楽しく遊ぶことができる場や遊び方を選ぶこと。
- b 器械・器具を使つての運動遊びの動き方を知り、友だちのよい動きを見付けること。

【手順②③】身に付けさせたい学習内容と児童の実態から、本単元で指導する直接的指導のポイントを、どの順番で、どんな内容を指導するのか、意図的に計画した。さらに、それぞれの時間に児童から引き出したい「イメージ言葉」も考えた。